
梅雨に歌う 3 つの詩

mugi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

梅雨に歌う3つの詩

【Nコード】

N3448H

【作者名】

mugi

【あらすじ】

梅雨の時期ということ。初投稿です。よろしくお願いします。

梅雨の籠

窓の外には雨が降っている
阿々　懐郷よ
いつかの空に似ている

あの子の云ったように
菖蒲の花が濡れている
海に流れ込んでいる

心が遠くに往くように
軀も遠くに往かれたら

我も我もと鳥籠の
籠の鳥が逃げていく
足なき籠は終に動かず
思いの掛けるその先に
濡れ羽の一縷を視るならば

硝子の残照

ピンクの

硝子が云っている

「いやあいいひかりだ」

「いやあいいひかりだ」

隣のぴんくのがらすが云つた

西洋かぶれの埃のかぶった双つ

舟と靴の硝子がかけ合いをしている

「いやあいい影だ」

「いやあいい影だ」

典雅な様子の硝子の双つ

今日のまあいお月様の

昔々の光が灯っているんだよ

「阿々
いい昼だ」

「阿々
いいひるだ」

埃の向こうの其のまた
硝子の飾り棚のなか

今日も光っている

[illegible]

こころの風景

誰もが

心の中にはずの風景が
 なのになまらなくうつくしくかえりたくなるような
 それをこころのなかの風景と呼ぼう

雨が上がったあと
曇天のなかカーテンを閉めるとき
白い娑羅の花がぼたりと落ちた
その時を
侘びしくおもいます

家に桃があれば
何処へ往つても
ふくいくたる匂いがするのを
そのままとっておきたい
その時を
幸せにおもいます

梅雨の季節の夕暮れは
心の故郷にかえります

(後書き)

読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3448h/>

梅雨に歌う3つの詩

2010年10月10日07時07分発行